「推し活フラペチーノ」

―初稿―

2024/7/28

雨森 れに

〈人物表〉

飯塚　麗　（17）　レイにハマっている高校生
五十嵐　芳樹　（30）　レイの中の人。接客のいい書店員
レイ　（20）　芳樹が演じるVチューバー

〈ログライン〉

不登校の麗が、神扱いしているVの中身である芳樹と関わろうとする。

〈ねらい〉

テーマ触媒：はじまり
恋のきっかけとはじまりを描く
フラペチーノで愛の溢れ方と時間の経過を表す

1.

麗の部屋（夜）

Ｖチューバー情報の雑誌をめくる飯塚麗（１７）の指。

麗、ニッと笑みを浮かべる。

2.

書店・外（夕）

ビル１階にある書店。ガラス張りで店内が見える。

眼鏡をかけた五十嵐芳樹（３０）が本を並べている。

学校帰りの麗が書店に入っていく。

3.

書店・中（夕）

本棚に「接客コンテスト優勝　五十嵐店員の選ぶ接客本５選！」とポップが貼ってあり、接客本が並んでいる。

麗、メモを見ながら本を探す。

芳樹、通りがかる。

麗　「すみません、これ探しているんですけど」

芳樹　「『Ｖチューバーになる１０の方法』ですか。配信に関しての本はわかりにくいところにあるんですよ。案内しますね」

優しそうな笑顔で対応する芳樹。

麗、にやりと笑って、

麗　「Ｖチューバーのレイさんが教えてくれてもいいよ」

芳樹　「（笑みをひきつらせて）どういうことですか」

麗　「レイって私と同じ名前でさ。最近推してるの」

芳樹　「あぁ、そういう方がいるんですね。推し活、いいと思います。じゃあ、本のところまで案内しますね」

芳樹、早足で歩き出す。

麗　「ね、あなたがレイでしょ。接客コンテスト１位なんだ？配信では俺様なのに」

芳樹の後ろについていく麗。

芳樹、焦った表情。

×　×　×

本を探す芳樹。

その後ろ姿を、麗は腕組しながら眺める。
芳樹は棚から本を取り出す。
芳樹、笑顔で、

芳樹　「これがお探しの本ですね。似たような内容の本もありますので、ゆっくり選んでくださいね」

麗　「（本を受け取って）なんでバレたのかとか聞かないんだ」

芳樹　「えっと、ちょっと言ってる意味が……」

麗　「聖人君子みたいな顔してさ（スマホを操作する）」

レイの声「俺が一番偉いんだから、俺の言う事聞いてりゃいいんだよ！」
芳樹、硬直。

麗　「仮想空間だと、けっこうモラ気質だよね。もう一個流そっか？　聞く？　声、そのまんまだから他の人にもバレるかもね」

芳樹　「（睨んで）他のお客様のご迷惑になるので」

麗　「やば。めっちゃいい、その顔。今日、ここ何時まで？」

芳樹　「（吐き捨てるように）８時」
麗、腕時計を見る。

麗　「あと1時間ね。三角公園わかる？」
芳樹、頷く。
麗、笑顔で芳樹に本を返す。

麗　「待ってるね」
麗、手を振って去る。
芳樹、苛立たしげに本を元に戻す。

4.

公園（夜）

公園の時計は9時を指している。
麗、ブランコに座ってフラペチーノを飲んでいる。
芳樹、不機嫌そうに、

芳樹　「どうも」

麗　「逃げちゃったと思ってた」

芳樹　「仕事が押して。アンタこそ帰ってるかと」

麗　「わたし、麗。麗って呼んで」

芳樹　「名前なんかどうでもいいよ。それよりどうしてバレたの

か知りたいんだけど」
麗、ため息。
つまらなそうにフラペチーノを飲む。
芳樹「何なの？　俺を脅して何になるって？」
麗「別に脅してないし」
芳樹「じゃあ何」
麗「推し活」
芳樹「ふざけんなよ！」
芳樹、地面を蹴る。
小石が麗の足に当たる。
麗「いたっ」
芳樹「ようやく登録者数1万越えたのに！　なんでこんな奴に振り回されなきゃなんだよ！」
麗、足を押さえたまま芳樹を見つめる。
地面を蹴り続ける芳樹。
麗、バツが悪そうに小声で、
麗「誰にも言わないよ。ただ、神様に会えて浮かれちゃっただけ」
芳樹「神様？」
麗「私、不登校ってやつでさ。鬱々としてたわけ。で、気晴らしにＹｏｕＴｕｂｅ見てたらレイを見つけたの」
麗、フラペチーノを持つ手に力をこめる。
容器から地面へ水滴が垂れる。
麗「俺がルール！って感じなの見てたら、私もそれでいいのかもって思えて。何？　勇気貰えたみたいな？」
芳樹、口を結んで黙っている。
麗「マインド貰いたくて常にアーカイブ見てんの。おかげでちょっとずつ学校行けるようになったんだよ」
麗、はにかむ。
麗「んで、先月さ、学校帰りに本屋寄ったらレイの声するじゃん。レイかもって思って毎日本屋通っちゃった」
芳樹「確かに。見覚えある」
麗「キモくてごめんね。んでイントネーションとか言葉選びっての？　一緒なの気付いちゃって、今日思わず……」

芳樹「でも声かけるってことは、何か求めてるんじゃないの？」
麗、下を向き、フラペチーノを膝に置く。
小石が当たった痕の横を、水滴の水が一筋通る。
芳樹「メモも書いてさ。思わずって言うわりには用意周到すぎない？」
麗、下を向いたまま動かない。
芳樹「Ｖの情報雑誌とかでもいいはずなのにさ。わざとわかりにくいところにある本を指定したでしょ」
麗、吹き出す。
麗「さすが頭がキレるなぁ」
芳樹「やっぱり計画的だったんだ」
麗「うん。ホントはレイかどうかなんて、どうでもいいんだ」
芳樹「え？」
麗「レイっていう確信はあったけど。私は五十嵐さんと話したかったの」
麗が溶けきっているフラペチーノを混ぜるように回す。
芳樹「それってどういう……」
麗「ずっと聞いてばっかだね」
芳樹「理解できなさすぎる」
麗「はじまりはレイだったけど」
麗、ブランコから降りる。
芳樹、目の前に来た麗に警戒する。
芳樹「なに」
麗「五十嵐さんが好きなんだよね」
芳樹「はぁあ？」
麗、笑顔でフラペチーノをすする。
芳樹「意味わかんない。怖い」
麗「レイは俺様だけど、なんかどっか優しいじゃん。ぜんぶわかった上で俺様やってるよね」
芳樹「ま、まぁ……もう３０歳だし多少の分別はあるけど……」
麗「そっそ。五十嵐さんは普通に大人で優しいの。レイは勇気をくれて、五十嵐さんは癒しなわけ」
芳樹「レイはそういうキャラ作りを意図してるから……」

麗　「意図してリスナーに勇気与えちゃうってすごくない？
　マジ、神様」
芳樹　「それは嬉しいけど、けどだよ。Ｖの中身知っちゃったら
　台無しな感じあるでしょ。正直」
麗　「ううん。むしろ、萌えた。２０歳設定の俺様が、現実で
　は聖人君子なオジサン書店員。やばいって」
芳樹　「え、えぇ……」
麗　「そうやって戸惑っているところもギャップ萌え！　ね、
　私が求めてること知りたい？」
芳樹　「あ、はい……」
麗　「『卒業したら俺の女にしてやる』って言って」
　芳樹、ドン引きして一歩下がる。
麗　「それか私と付き合って」
　一歩進む麗。
芳樹　「いや、むりむりむり」
　更に一歩下がる芳樹。
麗　「五十嵐さん、私、あなたの事が好きなんです！」
芳樹　「怖いって！　無理です！」
　麗、立ち止まる。
　手にあるフラペチーノは汚く分離している。
麗　「（俯いて）引きこもりのキモオタだからですか」
芳樹　「そうだけど、そうじゃなくて。学校に行き始めてるんで
　しょ。学校でいい人見つかるよ！」
麗　「学校にいけるようになったのは、五十嵐さんのおかげじ
　ゃないですかぁ……」
　麗の肩が震える。
　芳樹、麗が泣いているのかと思い様子を見る。
芳樹　「えっと」
麗　「（涙声で）友達。私、友達いないんで、五十嵐さんなっ
　てください……」
芳樹　「わかった。わかったから。友達になろ」
麗　「やったー！　うれしー！」
　麗、顔をあげて笑う。
　呆然とする芳樹。

麗　「あっもう１０時じゃーん」
　公園の時計は１０時５分。
麗　「五十嵐さんが職質されちゃうからもう帰るね。また明日～」
芳樹　「ちょ、ちょっと……」
　走って去っていく麗。
　芳樹は何もできずに麗の後ろ姿を見ている。

5.

公園・外（夜）

ゴミ箱に飲み干したフラペチーノの容器が捨ててある。

おわり